

鈴鹿山麓混成博物館物語2

寺院と城郭

殺生を戒める寺院

殺生を行使する武家が拠る城

一見、相反する性格を持つ二つの施設ですが、
戦国に生きた人々の感性を通してみれば、それは自然に結びつきます。
新たな視点で戦国の文化を楽しむ扉を開けてください。

寺院と城郭

敏満寺城(多賀町)・勝楽寺城(甲良町・多賀町)・観音寺城(東近江市・近江八幡市)・長光寺城(東近江市・近江八幡市)。寺院の名前を冠した城郭があります。一方、湖東三山の百濟寺(東近江市)・金剛輪寺(愛荘町)は、百濟寺城・金剛輪寺城と呼ばれる場合があります。

殺生を忌み、衆生を済度することを目的とした寺院と、これと真逆の戦闘装置としての城郭が結びつく事例は、近江だけではなく全国にみられます。一見矛盾したこの関係も、寺院の成り立ちと城郭に込めた武家の戦略の変化を対比して考えれば、何の矛盾もなく結びつきます。

1. 武装する寺院

戦国時代の文化を理解するために押さえておかなければならない、当時の人たちの感性が二つあります。

戦国時代の感性その1 「この時代に生きる殆んど全ての人たちは、神仏の存在を信じていた。」

この時代、神も仏も同体でした。この事を踏まえて、人智を超える、「五穀豊穰」「風雨順次」「子孫繁栄」「立身出世」「武運長久」「極楽往生」等、人の力の及ばない自然の力、運命の力によって起きる事象は全て、神仏の力によるものと信じられていました。このため、人知の及ばないこと(欲望)を叶えるためには、人々は、神仏の力にすぎるしかなかったのです。

戦国時代の感性その2 「僧侶を含め、人間とは欲の動物である。」

人間という動物は、「○○したい」「○○になりたい」という「欲」を持っています。そしてこの「欲」を満たした時、ここに有形の「財」が生まれ、「この財をさらに増やしたい」という新たな欲を、人は、ごく一部の聖人を除き、多かれ少なかれ持っています。

この二つの感性が、戦国の歴史を動かしました。人知の及ばぬことに対する欲求を叶えるためには、人の欲望を神仏に届ける必要があります。その中立ちをしたのが、天台宗・真言宗を始めとする寺院でした。寺院は、常人では理解できない難解な教義と複雑な修法を駆使した加持祈祷により、天皇・貴族・上級武家たちの祈願(欲望)を神仏に届け、それに対する神仏の応え(御利益)を引き出し、祈願者に神仏に成り代わり、これを授けます。当然、見返りが来ます。その見返りは多くの場合、「土地」という財の形をとります。頂いた土地は経営しなければなりません。経営により、さらに財が増えます。人間は欲の動物であり、僧侶とてその例外ではありません。「さらに財を増やしたい」。こうして様々な経済活動を行う中で、財はさらに膨らみます。

当然、その財を狙うものが現れる(現れるかもしれない)、という不安は、財を守るうとする心象を動かします。ここに暴力を行使して財を護る、という様態を生み出し、寺院自身が財を守るために、城塞化することになります。



延暦寺:城壁を思わせる石垣(大津市)

延暦寺東塔東斜面に展開する石垣。僧房の石垣だが、城壁を思わせる迫力がある。延暦寺は日本最大級の寺院で、護るべき財を多数保有していた。



清水山城本堂谷(高島市)

清水山城は湖西最大の山城で、山城部分と、山麓に展開する僧房を骨格とした、本堂谷と呼ばれる屋敷群からなる。本堂谷は堀と土塁に囲まれた防御性の高い空間である。



弥高寺大門(米原市)

伊吹山の中腹に展開する弥高寺は、伊吹山四力寺の一つとして栄えた。大門は完全な食違虎口となり、その前には壮大な横堀が刻まれる。山城そのものの構造である。

敏満寺

日本の大動脈である名神高速道路。
行き交う車両が暫しの休憩をとるところが多賀サービスエリアです。
実は、広大なSAのほぼ全てと、
その南西に聳える青龍山の麓一帯に展開していたのが、
天台宗の大寺院であった敏満寺です。
敏満寺は、蓄積した財を寺の中に城を構え、護ろうとしましたが、
浅井長政、織田信長との戦いに敗れ、歴史の表舞台から姿を消しました。

〈アクセス〉 名神高速道路多賀SA。国道306敏満寺付近。

敏満寺城土塁

青龍山

敏満寺があった多賀。ここを流れる芹川と犬上川との間に美しく聳える山が青龍山です。青龍山の山頂付近には磐座があり、ここに龍神が祀られています。山の名前は、この龍神がもたらす水に由来していると考えられます。

人間の暮らしに欠くことのできない水の確保は、何時の時代も切実な問題だったはずですが。麓に広がる平野から眺めれば、芹川も犬上川もこの青龍山の麓から流れ出てくるように見えます。また、青龍山自身からも水が流れ出ています。まさに多賀を護る山が青龍山であり、この山を神として仰ぐことは、自然な心象であったと考えられます。

青龍山の麓に立地した敏満寺は、まさにこの水を生み出す山に対する信仰に始まったといえるでしょう。



青龍山

大門池

敏満寺の伽藍の中心は、現在の胡宮神社の境内にほぼ重なっていると考えられます。胡宮神社から名神高速道路側を見下ろすと、水を満々とたたえた「大門池」が見えます。この大門池を中心としたエリアは、奈良時代に東大寺が建立されるに際し、その経営の母体として東大寺に施入された「水沼荘」に相当すると考えられています。

大門池は、背後に聳える青龍山から流れ出る小河川を水源とし、用水を必要とする時期に備え、水を貯え続け、そして、その下流に広がる広大な水田を涵養してきました。水源の様態はずいぶん変わりましたが、用水を貯えるという機能は、奈良時代以降、現代にいたるまで、連綿と維持され続けてきました。敏満寺もこの池に依拠した寺院でした。



大門池

胡宮神社

現在、敏満寺の跡は胡宮神社の境内に替わっています。胡宮神社という変わった名前は「こうのみや」であり、「こう」は「高」であり「たか」に繋がるという考えがあります。つまり「たかのみや=たがみや=多賀宮=胡宮」となり、胡宮神社も多賀大社と並ぶ多賀の聖地ということになります。

実際、多賀で目立つ山は青龍山であり、この麓に鎮座する胡宮神社は、多賀の起源としてふさわしいように思えます。しかし、この様態は、敏満寺が戦国時代に壊滅して以降の事であり、元来は、鎮守として、敏満寺と共に青龍山を祀る不離一体の神社でした。

敏満寺が姿を消して以降、胡宮神社は多賀大社の影響を強く受け、多賀大社と同じ神を祀る神社に変容していきます。



胡宮神社

聖徳太子と観音堂

敏満寺の縁起には聖徳太子による開基を伝えるものがあり、胡宮神社境内にある大日堂の横には、聖徳太子が自ら刻んだと伝えられる、巨石に線刻された十一面観音像が安置されています。

近江の湖東エリアには聖徳太子開基伝説を伝える社寺が極めて多数あり、独特の宗教文化圏を形成しており、敏満寺もその一角をなしています。聖徳太子開基伝説を持つ寺院の多くが天台系寺院であり、本尊として、十一面観音を中心とする密教系の尊格を祀る共通点があり、敏満寺もこの中に含まれます。おそらく、敏満寺の教線拡大のツールとして、日本仏教の祖であり、天台教学とも関係の深い聖徳太子が、ブランドとして使われたのでしょう。



敏満寺十一面観音

敏満寺の遺構

隆盛を誇った敏満寺ですが、戦国時代の末期に浅井長政の攻撃により衰退し、次いで織田信長と戦って敗れ、歴史の表舞台からは姿を消します。現在、敏満寺の姿を伝えるものとしては、敏満寺集落から胡宮神社の参道に向かう道が、名神高速道路の高架を潜るところに残された「仁王門」跡の礎石や胡宮神社境内に残された井戸があります。

また多賀SA下り線の施設の背後に森林が広がっていますが、この林床をよく観察すると、人工的な凹凸があちこちに見られます。これは敏満寺に付随した小さな寺院(僧房)を囲んでいた土塁(土手状の壁)の跡です。

この他、胡宮神社に隣接する大日堂には、敏満寺に由来する多数の仏像が伝えられています。



敏満寺仁王門跡の礎石

敏満寺の発掘調査

名神高速道路多賀SAを整備する際、大規模な発掘調査が行われ、敏満寺に付随する様々な施設が見つかりました。特に下り線の駐車場を整備した際に見つかった遺構が、敏満寺の性格をよく表しています。

それは、大きな甕を多数埋め込んだ遺構で、藍染の甕、油の貯蔵甕等いくつかの考えがありますが、酒の醸造甕と考えるのが、最も妥当と考えられます。敏満寺は、寄進された広大な水田を持ち、ここから多くの米が生産されたことでしょう。僧侶が消費しきれないほどの米。この財をさらに増やす方法としては、貸付と、醸造業が効率的です。発掘調査で見つかった埋甕は、敏満寺が財を増やすために積極的な経済活動を展開していたことを教えてくれます。



敏満寺遺跡埋甕遺構



石仏谷

石仏谷

胡宮神社の境内の南側一帯に多数の石仏や石塔が散乱していることが知られ「石仏谷(いしほとけだに)」と呼ばれていました。この不思議な空間の性格を解明するために発掘調査を行ったところ、さらに多数の石仏や五輪塔を中心とする石塔が、規則性をもって安置されている様子が確認され、この下から、蔵骨器と思われる、多くの土器類も見つかりました。石仏谷は敏満寺の時代の墓地、それも、日本有数の規模の墓地だったのです。敏満寺の僧侶だけのものとは思えない大規模な墓地。ここに埋葬された人たちは、敏満寺を中心とした都市ともいえる空間で活発に活動していたでしょう。石仏谷は、宗教活動が経済財活動を伴い、財を蓄積していった様子を具体的に語ってくれます。

敏満寺城

名神高速道路多賀SA上り線の北側に、敏満寺城の縄張りが公園として整備されています。城は敏満寺集落から多賀SAに登る通路を挟んで南北に分かれています。中心となるのは北側の部分と考えられます。入り口を複雑に屈曲させ(食違虎口)、一部に石垣を用いた高い土塁に囲まれた城は、敵の侵入を阻止しようとする、強い意志を感じさせます。

何故、敏満寺に城が必要なのか。活発な生産活動を行い、多くの財を貯えた宗教都市ともいえる姿に発展した敏満寺は、台頭してきた武家たちの格好の餌食です。その脅威から寺(財)を護るためには、武装する選択肢しかなかったのでしょう。しかし、浅井長政、そして織田信長との戦いに敗れ、敏満寺は歴史の舞台からその姿を消してしまいました。



敏満寺城虎口

金剛輪寺

行基による開基伝説を伝える金剛輪寺。

山門から本堂までの間、延々と石段を登りますが、その左右には平地が雛壇状に連続しています。

これらは全て金剛輪寺に付随する僧房(小さな寺)跡で、金剛輪寺の経営を支えていました。

金剛輪寺を会社だとしたら、会社を運営する様々な部署に相当します。

さらに、普段、観光では立ち入らない本堂の後方の尾根には、山城にみられる堀切が刻まれており、金剛輪寺が城としての機能を持っていたことを示しています。

〈アクセス〉 愛荘町松尾寺874 名神高速道路湖東三山スマートインター下車。国道307を北に、松尾寺右折。

金剛輪寺



金剛輪寺の石垣

金剛輪寺城

現在の金剛輪寺の参道(北谷)の南にも、同じように本堂を目指して伸びる参道が遺跡として残され、この部分を南谷と呼んでいます。そして、本堂を中心として展開する僧房群を守るように、その南北に伸びる尾根上に堀切、堅堀が刻まれています。寺院経営のために整備された境内を護ろうとする城郭的装置は、金剛輪寺に護るべき財が蓄積されていたことを明確に示しています。

また、僧房跡の随所に石垣が築かれ、これを護っているように見えます。記録によれば、金剛輪寺を始めとする寺院には、城郭に先行する石積みの技術があり、観音寺城の石垣の築造に、この技術が迎えられました。戦闘の専門家である武家にも、寺院の防御装置が有効に見えたのでしょう。

金剛輪寺本堂

国宝に指定されている金剛輪寺本堂は、元寇の戦勝記念として、六角頼綱の寄進により建立されたとされていますが、南北朝期に再興されたものであり、この頃が金剛輪寺の絶頂期と考えられます。

しかし、応仁の乱(15世紀後半)以降、神仏を恐れない武家が台頭し、事あるごとに金剛輪寺が蓄えた財を蚕食していき(『げぐらべいせんげようちよう下倉米銭下用帳』)、徐々に寺院が力を落としてゆく様子が見て取れます。金剛輪寺には、元亀2年(1571)の織田信長による比叡山焼き討ちに際し、僧が機転を利かせて焼き討ちを免れた、という伝説が伝えられていますが、この時点で既に、強奪する財の無い寺院にまで衰退していた可能性もあります。



金剛輪寺本堂

百濟寺

湖東三山の一カ寺である百濟寺は、「地上の楽園（ルイスフロイス『日本史』）」と表現されるほど繁栄した寺院でしたが、織田信長の焼き討ちにより壊滅しました。現在遺跡として残されている百濟寺の規模は、日本最大級の寺院遺跡として知られていますが、随所に「百濟寺城」ともいえる、武装した寺院の姿も垣間見えます。

〈アクセス〉 東近江市百濟寺町323 名神高速道路八日市インターより国道307、妹北より地方道229百濟寺。

百濟寺仁王門



聖地を背後に建つ百濟寺

聖地としての百濟寺

これまでに紹介した、敏満寺・金剛輪寺と百濟寺の立地には共通点があります。それは、鈴鹿山麓に立地する天台系の寺院である勝楽寺・西明寺・大覚寺にも共通することです。その共通点とは、いずれの寺院も標高はそれほど高くはないものの、秀麗な山容の山を背負って立地しているということです。そして、これらの山は小さな谷の水源で、この小さな谷の流れが、山麓の田畑を涵養する用水として使われていることも、共通します。古い時代の未熟な土木、測量技術では、愛知川や犬上川などの大きな川に堰を作り、水を引き込むことはできませんでした。しかし、小さな谷であれば御す（ぎよ）ことができます。山から流れ出る小さな谷こそが耕作の生命線で、この水源に水を生む神仏が祀られるのは必然です。

聖徳太子と百濟寺

百濟寺は聖徳太子が開基した、近江最古の寺院と伝えられています。縁起によれば“建立に当たって、百濟の国の僧道欣らに力を発揮させた。本尊は、百濟伝来の杉の霊木に聖徳太子が自ら刻んだ十一面観音である。これらの由来により百濟寺と呼ばれるようになった”縁起をそのまま史実として捉える事はできません。縁起の裏には、百濟寺の麓に広がる緩傾斜地を開発するためには、境内から流れ出る水を用水として使うことが必要であり、その土木工事に大陸から渡来した人々の技術が投入され、その結果、百濟寺の繁栄がもたらされた。という物語が流れているのでしょう。そして、繁栄を極めた百濟寺の「格」を一層高めるために、聖徳太子が招かれたのだ、とも考えられます。

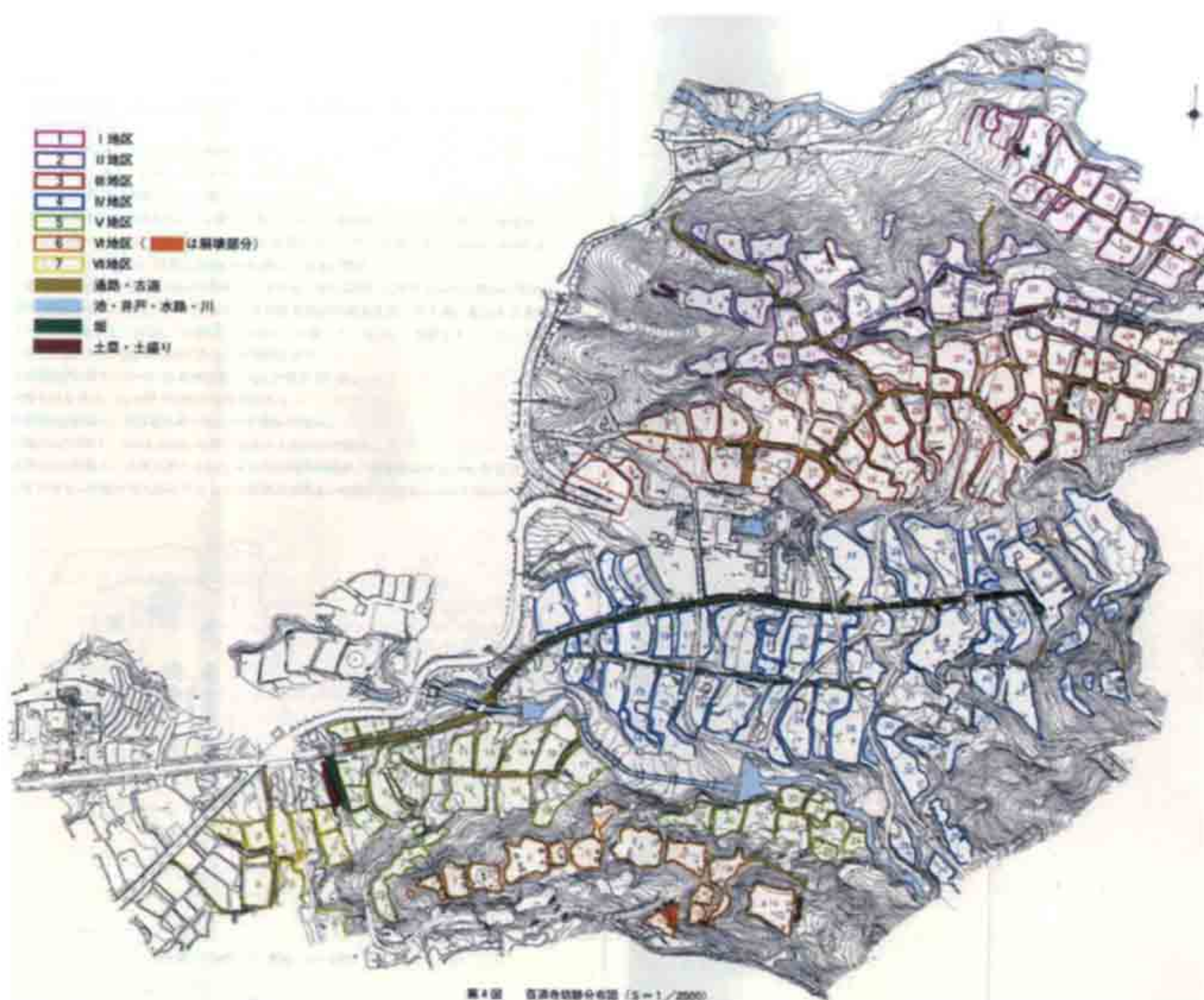


百濟寺本堂

百済寺樽

百済寺でも敏満寺と同様に、酒の醸造が行われていました。実は、百済寺で醸された酒は銘酒「百済寺樽」として遠く京まで出荷され、都人の喉を潤していたことが、様々な記録に残されています。そして、このことを裏付けるように、百済寺の僧房跡の発掘調査で、敏満寺で見つかったものと同様、大きな甕を多数埋め込んだ遺構が見つっています。

お米が貴重品であった時代、その米をお酒に変えるためには多くの余剰米を持つ必要があります。百済寺はこれを持っていました。そして酒に変わった米は、米自身を販売するよりも、はるかに高い利益を生み出しました。利益がさらなる利益を生み、その利益が次の投資に向けられる。百済寺もまた、俗的世界へ傾斜していったのです。



いんじょうじ 引接寺

百済寺赤門の下手に、引接寺があります。引接寺は現在残された唯一の百済寺の子院ですが、その境内には驚くような光景が広がっています。無数という表現が相応しい程の石仏・石塔などの石造物が林立しているのです。敏満寺の石仏谷の石造物は、墓地に安置されたものが、それほど位置を動かさず残されていますが、引接寺の石造物は全て、広大な百済寺の境内から寄せ集められたもので、百済寺に関係する人たちの墓に据えられていたものです。

百済寺では当然のことながら、多くの僧及び俗的な活動を行う人たちが、本尊の十一面観音に聖的・俗的に奉仕するため暮らし、ここが宗教都市とも言うべき活況を呈していたことを、引接寺に集積された石造物群が物語っています。



百済寺埋甕遺構

ルイス・フロイスが見た百済寺

戦国期に日本に渡来した宣教師ルイス・フロイスは、本国への書簡の中で「Facusangiと称する大学には、多数の相互に独立した僧院および座敷と庭を備えた地上の天国である僧の住屋が一千戸あった。」あるいは、『日本史』の中で、「七百年このかた、あらゆる戦乱を免れて今に至ったものであったから、そこには相当な富が蔵されていた。それは百済寺と呼ばれた。」と報告をしています。「富が蔵され」という表現から、百済寺は寺院でありながら、世俗的な経済力をも併せ持っていたことがうかがえます。

百済寺境内の調査では、尾根筋、谷筋に整然と並んだ180か所余りの僧房跡が確認され、フロイスの表現が決して大げさではなかったことが裏付けられました。



引接寺石造物

百濟寺城

百濟寺の宗教行為は、結果として世俗的な財を百濟寺にもたらしました。あくまでもこの財は、百濟寺の僧侶のものではなく、「本尊である十一面観音の財」である、という建前は貫かれます。しかし、それは百濟寺の言い分であり、この財を狙うものにとっては、十一面観音に対する多少の呵責の念を抱くことがあっても、やはり俗的な財です。従ってこれを奪うものが現れ、これに対抗するために、百濟寺は俗的な力を行使して、これを阻止しようとします。

この結果、百濟寺もまた寺院ではあるものの、外敵に備えた城郭的な構造を境内に持つこととなります。この事が最もよく表れているのが、赤門と一体となった壮大な横堀です。寺院とは思えない城郭の姿がここにあります。



百濟寺横堀

土塁のある僧房

広大な百濟寺境内の随所に、石垣で固められた僧房があります。石垣は斜面を切り開いて僧房を造成する際、その法面の崩落を防ぐため必然的に生まれた技術ですが、見る者を威圧する城壁としての役割も持つこととなります。

百濟寺の僧房の中には、石垣で固めた平場の上に、寺院には不似合いな土塁で囲った施設を持つ処もあります。まるで山城の郭です。土塁で囲うことには、聖なる空間を俗界から遮断する、といった意味もありますが、無論、外敵に対する防御という機能もあります。この坊跡の場合は、上段に本堂的な広い坊がありますが、ここには土塁がありません。何か、特別な財がこの坊にあり、これを護るため、このような武骨な装置が設けられたのかもしれませんが。



百濟寺土塁を持つ僧坊跡

百濟寺の焼討ち

百濟寺は元龜3年(1572)、織田信長の焼討ちに遭い、壊滅します。元々信長は、百濟寺を近江における氏寺的な寺院として、保護していました。現に、焼討ちの直前まで百濟寺に逗留しています。この時、百濟寺に程近い愛知川右岸では、信長に抵抗を続ける六角承禎が鯉江城に立籠り、これに対して信長の軍勢が包囲戦を展開している最中でした。

ところが百濟寺は、事もあろうに、信長と敵対する鯉江城に対して後方支援をしていたのです。この事を信長が知ったその瞬間、百濟寺の運命は決まりました。信長は百濟寺に対し、寺院としては保護するものの、世俗的な力での反抗は、これを絶対に認めないという、新たな時代の価値観を断固たる意志で行使したのです。



百濟寺坊石垣



ダンダ坊の虎口(大津市)

ダンダ坊遺跡は比良山中に数多く建立された山岳修行の寺院であるが、その最奥の館の前には、石垣で固められた食違虎口が造られている。このアンバランスな構造は、元龜3年(1572)に織田信長の命令により明智光秀らが造ったものと考えられる。



清水山城の石仏群(高島市)

清水山城は、天台系の寺院である清水寺の伽藍を骨格として築城されたとされている。最大の郭は中腹にあり、本堂跡と考えられており、主郭はその上位にある。城内には中世墓が残され、ここに由来するおびただしい数の石造物が集積している。



田中城:松蓋寺の流れをくむ観音堂(高島市)

田中城は、天台系寺院である松蓋寺の伽藍を骨格として築城されたとされている。最大の郭が本堂跡と考えられ、後に観音堂が建立された。主郭は清水山城と同様この上位にある。寺院を骨格とする城は何れも同じような構造を持つ。



小堤城山城:郭背面の石段(野洲市)

小堤城山城は、六角氏の家臣である永原氏の城とされ、逸名の寺院を骨格としていられる。最大郭は中腹にあり本堂跡と考えられる。この背面には石段があり少し上段にある小さな郭に至る。ここは、本堂の上に作られた鎮守跡なのだろう。

2. 寺にすり寄る城

ここまで、寺院が宗教活動を通して得た財を俗的に護るため、寺院自身が城郭的な性格を帯びていた例を紹介しました。

寺院と城郭との関係には、寺院が暴力という俗の力を求める姿と真逆に、俗的な暴力装置である城郭が、その力を高めるために、寺院の持つ聖的な力を求める例も多くみられます。

戦国時代も後半に差しかかる15~16世紀代、有力な武家たちは山に城を構え始めます。この行動は「防御に有利な山城を求めた」あるいは「詰めの城としての山城を求めた」とも解されています。しかし、山城に対する発掘調査の結果を総合すると、どうやら武家たちは、山上で生活していたらしい事が明らかとなりました。武家は積極的に山に登り、ここで暮らしていたらしいのです。

この武家の行動は、戦闘の先にある「領国の統治」を見据えた行動のように見えます。武家が戦うのは、領国を安定的に経営するために、外敵、内敵を排除するためであり、本来の目的ではありません。武家が目指す領地・領国の経営のための拠点としての「城郭」の要素が高まるにつれ、武家は山に城を構えるようになります。そして、城を構えた山の多くが寺院が建立されている山、或いは磐座のある山、或いは神社のある山、すなわち、「聖地」が選ばれる傾向が顕著です。

この武家の行動の背景にあるのは、戦国時代の感性その1「この時代に生きる殆んど全ての人たちは、神仏の存在を信じていた。」です。城郭を構える武家には、暴力的能力があり、或いは人望もあったかもしれませんが、支配される者たちと同じ「人」です。人が人を支配するためには、俗的な力に加え、神仏の力をも身に纏う必要があったと考えられます。そのために選択された方法が、「聖地に城を構えること」でした。ここには、次のようなロジックが働きます。

- 寺院を始めとする聖地に、俗人である武家が城を構える。
- その武家が神仏の意に添わなければ神罰・仏罰が降るはず。
- しかし降らない。
- よって、その武家は、神仏に認められた者と主張する。
- こうして、聖地に城が出現する。
- 城ができたからと言って、聖地は聖地である。
- 人々は聖地に宿る神仏への祈りと帰依を続ける。
- いつの間にか、その帰依は、城に対する帰依と混同する。
- 城に宿る武家が、神仏の力を纏ったかのように錯覚する。
- こうして武家は、神仏の元、領国を統治する「格」を手にする。

この一連の武家の動きを、織田信長とその居城の関係から追ってみましょう。信長は清州城を足掛かりに尾張の支配権を確立しますが、清州城は全くの平城で、聖地性は全くありません。

次に、小牧山の上に城を遷します。小牧山は独立丘陵で、間々観音(ままかんのん)の鎮座する聖地です。領民は信長を仰ぎ見ます。

次に、稲葉山に城を遷し、岐阜城とします。稲葉山は稲葉大権現の鎮座する聖地です。稲葉山は標高が高く、信長は、より広い範囲の領民から仰ぎ見られます。

次に、信長は安土山に安土城を築城します。安土山は……。

安土城



稲葉山に岐阜城を築城した織田信長は、次に近江の安土山を選び、ここに安土城を築城します。

何故安土山なのか？

安土山は比高差100m程の低い山ですが、琵琶湖周辺の驚くほど広範囲からその姿を確認することができる稀有な山です。

琵琶湖を掌握することにより天下布武を目指した信長にとって、安土山は理想の聖地だったのでしょ

〈アクセス〉 近江八幡市安土町下豊浦 東近江市南須田町 主要地方道2号(朝鮮人街道)安土城

安土城イメージ



安土城大手道

安土城大手道

当然のことながら、安土城が築城される以前から安土山があり、様々な土地利用がなされてきました。城内からは7世紀代の瓦が採取されていますから、ここに古代寺院があったことが推測されます。また伝承では九品寺と呼ばれる寺院があったとされていますし、安土城よりも古い時代の仏像を伝える会勝寺、石部神社などの社寺が今に伝えられています。安土山もまた聖地だったのです。

安土城の大手道は、長さ約120m、幅約6mの直線路として知られています。客観的に見れば、防御を主とする城郭には矛盾する構造です。しかし、大手の最奥に天主(=本堂)があり、大手の左右に郭(=僧房)が連続するその姿は、金剛輪寺で見た天台系山寺の構造そのものです。

安土城天主台

安土山の最高所には天主が作られました。天主台の石垣を含めると50m近い高層構造物が安土山の上に出現したのです。ただでさえ高く目立つ山頂に、信長はこの基礎として天主台の石垣を築造しました。地盤を整地して直接天主を建てても良いはずなのに、あえて天主台を構築した、としか考えられません。信長は天主を建て上げる前に、一万人の人間を動員して「蛇石」という巨岩を山頂に引上げた」と記録されています。しかし、そのような岩はありません。あるとすれば、天主台の中に埋め込まれたとしか考えられません。蛇石は人為の磐座で、この上に建てられた天主は神殿であり、ここに座す信長は神ということになります。安土山の持つ聖地性を一層高めるための装置が、天主台だと考えられます。



安土城天主台

観音寺城

近江半国守護の佐々木六角氏は、始め太郎坊山の麓の小脇に館を構えます。

これは全くの平城です。次に近江八幡の金剛寺に拠点を移します。

寺を城に取り込んだのです。そして、織山に観音寺城を構えます。

観音寺城の名前は、織山に建つ「観音正寺」に由来します。

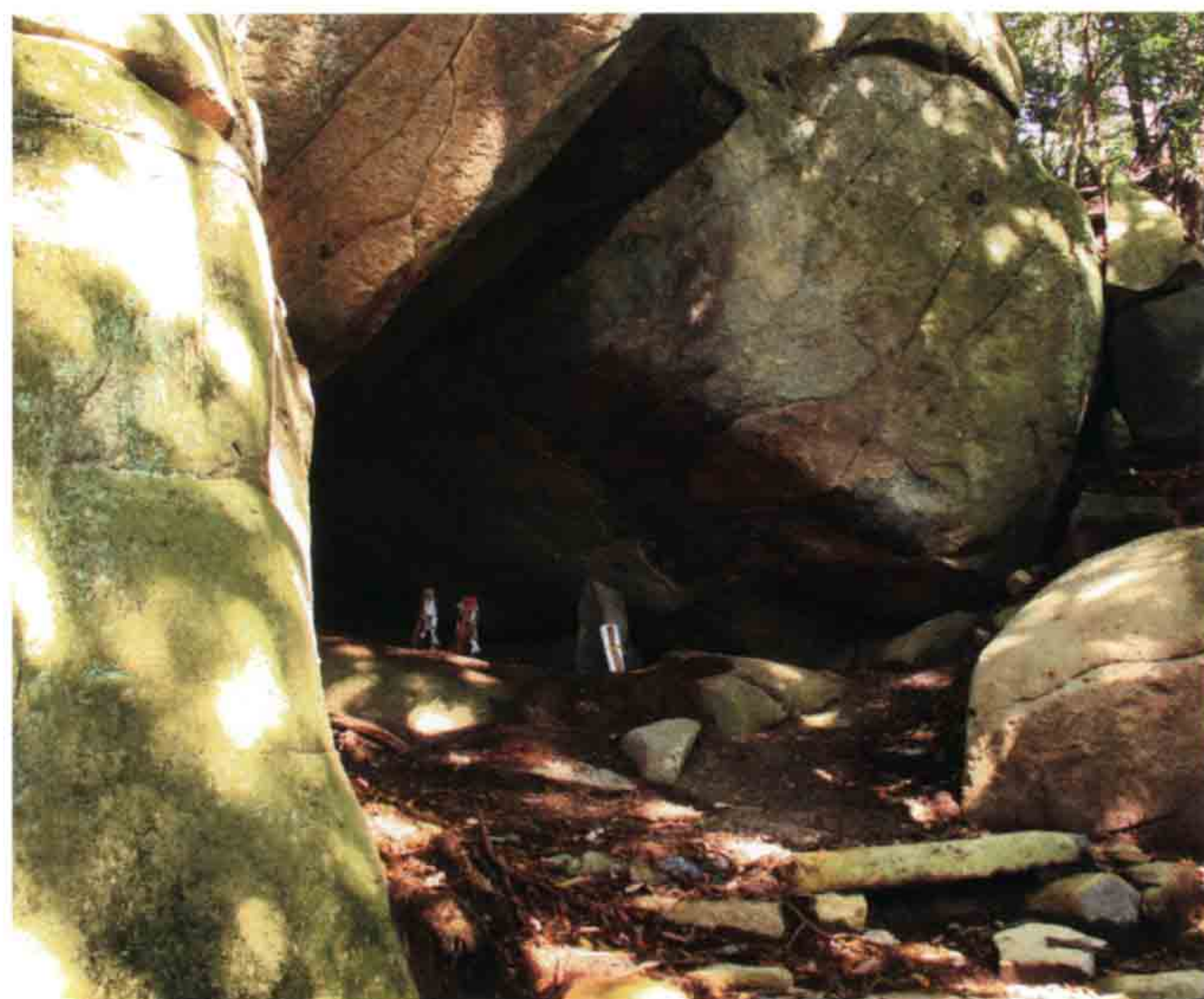
そして、織山は近江の平地の殆どから見ることのできる山、

言い換えれば近江を護る神の宿る山です。

六角氏は、織山と観音正寺の力を求めました。

〈アクセス〉 近江八幡市安土町石寺・東近江市五個荘川並 国道8号より石寺、徒歩登山。桑實寺境内より徒歩登山。
安土側・五個荘側より林道を利用して山上まで車利用(有料) 滋賀県立安土城考古博物館より徒歩登山。

織山



観音正寺奥の院

観音正寺奥の院

織山に建つ観音正寺は天台系の寺院ですが、その信仰の根源は奥の院と呼ばれる聖地にあります。ここは、巨岩が折り重なり洞穴をなし、この中で祭祀が今も行われていますが、その様態は仏式の祭祀ではなく、巨岩の洞穴に対する自然信仰そのものです。今より樹木が少なかったであろう戦国時代。奥の院の巨岩は麓から仰ぎ見ることができたはずですが、現に、奥の院を奥宮とし、ここに宿る神を奥石神社として里に招き祭祀が続けられています。

或る日、織山の情景が激変します。観音正寺が消え、観音寺城の姿が現れ、ここに六角氏が、座したのです。山麓の住人は、あたかも織山の神が六角氏に変身したような錯覚を覚えたでしょう。

観音寺城平井丸

観音寺城は日本五大山城に数えられるほどの巨城ですが、その中心をなすのが、本丸、平井丸、池田丸と呼ばれる一角です。平井、池田は六角氏の家臣の名前です。これらの郭の内、標高的に上位に位置する本丸が六角当主の館跡とされていますが、むしろその下段に造成された平井丸が、前面を豪壮な石垣で飾ること、郭内部に石垣で囲った独立空間があり、ここに庭園の跡があること等から、六角当主の居館と考えられます。特に、庭園は、領主と家臣との間で身分の違いを確認するための「式三献」の儀礼を行うための舞台装置ですので、当主を差し置いて、家臣の館にこれが造られることはあり得ません。この三つの郭が一体となって、本丸として機能していたと考えるべきでしょう。



観音寺城平井丸

八幡山城

天正10年(1582)、本能寺の変の混乱の中安土城天主は炎上します。その後、安土城および安土城下町の機能は安土山より5kmほど南の八幡山とその山麓に移されます。琵琶湖に突き出た八幡山は標高283mの独立丘陵で、山頂には八幡神、山腹には聖徳太子に由来する願成就寺がありましたが、築城に際し、それぞれ現在の場所に移されました。

〈アクセス〉 近江八幡市宮内町 JR琵琶湖線近江八幡駅よりバス利用。県道2号中村町より西へ。

八幡山城主郭虎口



八幡山と日牟礼八幡

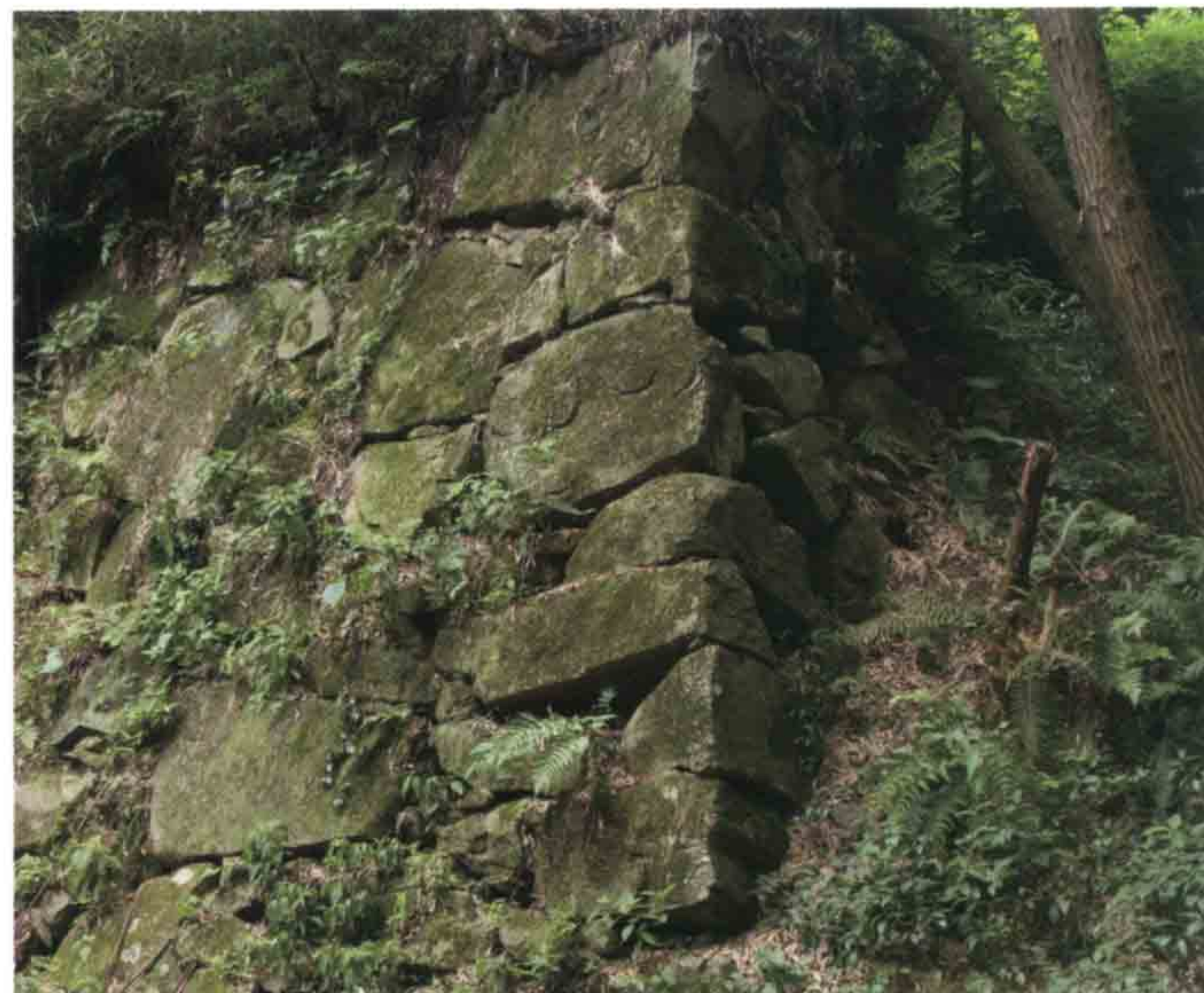
ひむれはちまん 日牟礼八幡

日牟礼八幡宮は、元々は、山頂の神を祭る奥宮に始まり、その里宮として、現在の場所にも社がありました。観音正寺奥の院と奥石神社との関係と同じです。しかし、八幡山城の築城により、奥宮は降ろされ、里宮と一体となり、現在の姿となりました。同時に神社と一体として祭られていた願成就寺は、小舟木町に移され、現在に至っています。

日牟礼八幡の始まりは、応神天皇、神功皇后のほか、宗像神と考えられる姫神を祀ることから、琵琶湖の航路を守る神だったと考えられます。山頂に立てば眼前に琵琶湖が広がり、この神社の意味を実感することができます。湖上からも、陸からも仰ぎ見られる山頂に、神仏に替わり、豊臣政権を象徴する城郭が出現したのです。

八幡山城秀次館

八幡山城にも天守があったとされています。しかし、秀次は信長のように、天主を自らの神殿として位置づけ、ここに鎮座する事はしませんでした。秀吉であればともかく、秀次が神となることは許されなかったのでしょう。替わって、秀次は山上の神仏の元から降り、山麓に広大な館を構え、ここに居住するとともに政務を執ることになります。秀次の段階で天主は、信長が創造した信長神(武家神)の神殿から、武家が領国を統治することの正当性を象徴する構造物に変容してしまいました。しかし、神仏の力を纏い領国に君臨するというロジックだけは、山城の姿として維持されました。後に八幡山城には秀次の菩提をとらう村雲御所が建立され、再び神仏の世界に戻るようになります。



八幡山城秀次館

彦根城

関ヶ原の合戦後、徳川家康は西国への備えとして、井伊家に命じて佐和山城に替わる新たな城の築城を計画し、その場所として、磯山、彦根山を候補とします。

磯山は磯崎神社の聖地、彦根山は彦根寺が鎮座する聖地です。

検討の結果、彦根山が選ばれ、彦根寺は北野寺と名を変え、城下に遷され、現在に至っています。

〈アクセス〉 彦根市金亀町1-1 JR琵琶湖線彦根駅より徒歩。名神高速道路彦根ICより湖岸へ。

彦根城天守

彦根寺

彦根城が築城された彦根山は、目や耳の病気に霊験あらたかな観音霊場として知られていました。平安時代後期に後白河法皇が編纂した『梁塵秘抄』に「験仏の尊きは(霊験あらたかな仏として尊ばれるのは)東の立山 美濃なる谷汲の 彦根寺……」と謡われています。寛治3年(1089)には、白川上皇、藤原師通等が参詣するなど、爆発的な彦根観音巡礼ブームが巻き起こったと伝えられています。彦根寺が彦根山の何処にあったのかは、彦根城に築城により、破壊され不明です。候補として、大手口から天守に至る途中に「金龍大明神」として、湧水を祀る処を挙げる事ができます。「目や耳の病に霊験あり」と伝えられますので、このように、清浄な水の湧く所に観音様がいたのかもしれませんが。



彦根城地藏堂と金龍大明神



彦根城大手門橋

彦根城の大手

現在の彦根城本丸へのアプローチは、JR彦根駅(中山道方面)から「いろは松」を通り佐和口から表門橋を渡るのが、一般的です。しかし、彦根城の正式な大手は、彦根城の南にあるキャスルロードから裁判所を経て内堀を渡る道です。観光客もあまり利用しないこの道が何故、彦根城の表玄関になるのでしょうか。それは、彦根城の前身である彦根寺との関係を見ると理解できます。彦根城の大手とこれに連なる城下の道は、彦根寺への巡礼街道だったのです。世俗的には中山道に向かう道が大手であるべきですが、彦根城が近江に君臨するためには、彦根山にいます観音様の霊威を否定することはできなかったのです。後にこの道は、朝鮮人海道と呼ばれるようになります。

聖地と城郭

ここまで、領国を統治する規模の城郭と神仏の世界との関係を見てきました。実は、神仏の力を利用するロジックは、下位の武家たちの城郭にも見られます。ただ、城を構える聖地がより地域的な聖地に小さくなってゆきだけです。国を治めるために、或いは村を治めるために神仏の力を借りようとするのは、神仏の力が生きていた時代に共通する心象だったのかもしれませんが、小さな城の例を見てゆきましょう。

太郎坊山

長光寺城(瓶割山城) 近江八幡市長光寺町 東近江市上平木町

長光寺城は、元亀元年(1570)に、近江に侵攻した織田信長の命により、柴田勝家が立て籠り、六角承禎と戦った際、「水の手を破られ、完全に包囲された勝家が、残り少ない水の入った瓶を割り、不退転の決意で六角氏と戦った」という伝説から、別名「瓶割山城」とも呼ばれています。この名前が有名ですが、城の前身は応仁の乱ごろまで遡るとされています。城の名の長光寺は、山の北麓にある、聖徳太子開基伝説を持つ長光寺に由来するものと考えられます。現在城内に顕著な寺院の痕跡は認められませんが、石造物が散乱するところがあり、何らかの寺院の施設があった可能性があります。また、南麓の日吉神社の近くには「富士瀧」と呼ばれる聖地があり、地域的な信仰を集めています。



近江八幡市長光寺町・東近江市上平木町

長光寺城富士瀧

後藤氏館と雪野山城 東近江市上羽田町

佐々木六角氏は、湖東地域に割拠していた有力な武家たちの連合政権の長、といった性格を持っています。中でも羽田に本拠を置く後藤氏は豊かな農地を背景に力を伸ばし、これを危険視した六角氏が、観音寺城内で後藤氏を暗殺するという「観音寺騒動」が勃発します。この後藤氏の居城が後藤氏館で、巨大な土塁と堀で囲まれた土造りの城です。そしてこの背後に聳えるのが雪野山で、山頂にある雪野山古墳に象徴されるように、この地域を護る神の山として信仰されています。後藤氏はこの山の力を纏うため、この山頂に城を作ります。しかし、雪野山は織山や安土山と異なり、羽田・平木の狭い範囲を見下ろす地域的な山です。後藤氏の権威も雪野山に宿る神の護る範囲に限定されていたのでしょう。



後藤氏館と雪野山

布施山城 東近江市布施町

奈良時代に起源を持つとされる布施溜池の東にある、頭が丸く突き出た特徴的な山容の山が布施山で、この山頂に築城されたのが布施山城です。城主は佐々木六角氏の家臣の布施氏で、その名の通り、布施溜池周辺の土地を領していました。布施山城の縄張りは特異な平面形を持っています。円形に近い隅丸方形の主郭の下に方形の副郭が接続します。この不思議な形は、山頂にあった、古墳時代中期の前方後円墳をそのまま城郭に改造したためです。布施山は典型的な神宿る神奈備型の山ですが、雪野山よりさらに狭い範囲からしか見えません。布施山から見える範囲を治める王が聖地に拠り、さらにここに布施氏が城を構え、山と古墳の力を取り込もうとしたのでしょう。



布施山



星ヶ崎城

星ヶ崎城 竜王町鏡

東山道(中山道)鏡宿を見下ろす、鏡山の先端に築城されたのが星ヶ崎城です。宿場と街道を護るための城で、城主は、六角氏の家臣である鏡氏とされています。この城の最大の特徴は、安土城に先行すると考えられる見事な石垣で郭を固めていることです。

しかし、石垣という当時の先進的な普請構造を持っているにも関わらず、防御性に乏しい、単純な縄張りで、むしろ寺院を想起させます。星ヶ崎城の山麓には、西光寺と呼ばれる寺院があったとされ、この寺院に伴う宝篋印塔などの石造物が残されています。星ヶ崎城は山中にあった西光寺に関連する寺院の構造を踏襲し、その名前は「ほうしがさき(法師ヶ崎)だったのかもしれない。

鈴鹿山麓混成博物館

鈴鹿山麓にある博物館が中心となり、様々な機関と連携しながら、歴史文化遺産を社会資源化することを目的に、2018年に結成された団体です。

〈構成団体〉

東近江市博物館

(能登川博物館・近江商人博物館・中路融人記念館・西堀榮三郎記念探検の殿堂)

愛荘町立歴史文化博物館

多賀町立博物館

一般社団法人東近江市観光協会

一般社団法人愛荘町愛知川観光協会

一般社団法人愛荘町秦荘観光協会

一般社団法人多賀観光協会

竜王町観光協会

一般社団法人近江八幡観光物産協会

琵琶湖汽船株式会社

滋賀第一交通株式会社

〈事務局〉

多賀町立博物館

〒522-0314 滋賀県犬上郡多賀町四手976-2

TEL 0749-48-2077

e-mail museum@town.taga.lg.jp

〈発行〉

2020年3月

鈴鹿山麓混成博物館

〈製作〉

鈴鹿山麓混成博物館

NPO法人歴史資源開発機構